



Title	セサル・バジェホ文献解題(1)生前詩集
Author(s)	松本, 健二
Citation	Estudios Hispánicos. 2002, 26, p. 117-132
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/97958
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

セサル・バジェホ文献解題(1)生前詩集

松 本 健 二

1. はじめに

1981年、当時の日本におけるラテンアメリカ文学研究を概観する文章が『ラテンアメリカ研究年報』創刊号に掲載されている¹。その後の各個別作家研究の進捗ぶりにここで言及するつもりはないが、少なくともセサル・バジェホ César Vallejo に関する限り、国内の研究史を振り返ってみると、特に1995年以降の研究・紹介状況に目立った進展が見られない²。断片的、概括的な紹介、単なる個別作品の分析などに留まらない今後の発展的な研究の礎とするためには、少なくともまず一次資料を中心とした基礎的文献のジャンル別・年代別の整理解題を行う必要がある。手始めに、拙稿では、バジェホの生前に刊行された初期韻文作品集2点の成立過程と、刊本の推移を取り上げる。

2. 生前詩集

韻文に関する限り、バジェホの生涯(1892-1938)において単独の刊本として発表されたのは、2点の作品集とそのうちの1点の再版、合計3点である。この初版2作品、およびバジェホ自身がスペインにおいてその編集と出版を見届けた *Trilce*。第2版を合わせた3点を、没後に刊行された詩集と区別して生前詩集と称する。

2. 1. Los heraldos negros.

Vellajo, César A.: *Los heraldos negros (poemas)*. Lima, 1918. 153pp. (以下 LHN)

ペルー中部アンデス山中に位置する町サントiago・デ・チュコに生まれたバジェホは1910年北の沿岸都市トルヒヨの大学に籍を置く。翌年大学転学のためリマへと赴くが、経済的事情により首都での学業継続を断念、同年トルヒヨに帰還。この年リマの雑誌『バリエダデス』*Variedades*。に1編の詩を投稿するも、同誌編集者クレメンテ・パルマのコラムで酷評される³。

その後は農場での労働などを経験しつつ、結局1913年トルヒヨに腰を落着ける。1915年にトルヒヨ大学へ提出されたスペイン・ロマン主義に関する学士論文は、現在その写真版を参照することができる。首都のサン・マルコス大で基礎的な教養科目を履修していた経歴を利用し、地元の初等学校の臨時教師としての職を得る。この時の教え子には後に小説家となるシロ・アレグリア⁴も含まれている。バジェホは1914年トルヒヨの文学サークル、通称「トルヒヨのボエミア⁵」に出入りし、後に*Trilce*の序文を執筆することになるサークルの主催者アンテノル・オレゴ⁶と知り合う。バジェホはボエミアでの交流を通し、当時の文学潮流の先端とも言えるイスパノアメリカ後期モデルニスモ詩の作家たち、あるいはホイットマン、ヴェルレーヌ、メーテルリンクなどといった、アンデス山中の狭い中世的な風土では決して入手し得なかった新たな文献の世界に分け入って行く。このボエミアには、後にペルー史上最大規模の学生運動を率い、やがてアブラ党党首となってペルー政治史に大きな足跡を残すこととなるピクトル・ラウル・アヤ・デ・ラ・トレ⁷がいた。バジェホ同様1917年までトルヒヨで過ごしたアヤのその後の馬車馬のような政治的活動の原動力は、後のリマの大学での読書体験やクスコでのケチュア語習得体験と並び、このボエミアでの文芸活動とそこにおける多様な人間関係など懐の深い教養にもその源をもつと言われている⁸。アヤ、そしてリマで同じく文芸運動⁹を率い1910年代後半のペルー文化の鍵を握っていた重要人物アブラアム・バルデロマル¹⁰、そしてさらに時代が下ればホセ・カルロス・マリアテギ¹¹と、政治思想の文脈と文芸活動の文脈とが密接に絡み合っていたのが1920年前後のペルー言論界最大の特徴である。バジェホとアヤとの具体的接点は、今日1編の詩となって残されている。1916年12月アヤがJuan Amateurのペンネームで執筆した戯曲*Triunfa vanidad*『虚栄の勝利』の上演をトルヒヨで観たバジェホが翌日トルヒヨの文芸誌に投稿した、戯曲と同名の詩である。放縦な生活を送る詩人とその恋人、恋人の父親は当初二人の結婚を反対していたが、詩人が名声を獲得したとたんにあっさり折れて芝居は大団円という、他愛のない内容であるらしいが、原本が残存していない以上なんとも批評のしようがない。後にLHNに含まれることになる韻文作品は、こうした時期、すなわち1915年から1918年にかけてトルヒヨとリマの文芸誌・新聞に一度、あるいは複数回掲載されたものである。なお、LHN個々の作品のオリジナル版とその異文などの資料については、後に挙げる特定の詩全集の

解説にて言及する。1917年12月30日再びリマを訪れたバジェホは、ホセ・マリア・エグレン¹²、バルデロマル、マヌエル・ゴンサレス・ブラダ¹³といった作家と会っており、前2者との会見の記録と後2者への追悼の記事がトルヒヨの文芸誌にそれぞれ掲載されている。また後にLHNに収録される詩の1編*El poeta a su amada*を、雑誌『バリエダデス』のコラムでまたもやクレメンテ・パルマによって酷評される。いわく「私はすぐこの愚作をゴミ箱に放り捨てたわけだが、その一瞬の間にも考えたよ。君はまったくもってトルヒヨの面汚しであるな。まあ心配せずとも、もし君の名前が有名になったりしようものなら、トルヒヨの善良なる市民が君の手に縄をかけてマラブリゴ行きの線路に縛り付けてくれるだろうさ¹⁴」と辛辣だが、パルマの一貫した保守的な批評の言説によって、今日、かえって当時のバジェホら若手詩人の位置づけを明瞭に理解することができる。なお、この後、このパルマの雑誌『バリエダデス』はバジェホと腐れ縁とも言える不思議な関係を築いていくのだが、それはまたいつか別の機会に語ることにする。そして、既に26歳になっていたバジェホは、それまでに文芸誌や新聞に投稿していた韻文をひとつにまとめ、ついに1919年一冊の詩集として刊行する。それがLHNである。リマの新聞に1918年3月31日付けでLHN刊行予告の記事が掲載されている¹⁵。3月2日付けでリマの別の新聞にバルデロマルによるバジェホの紹介記事が掲載される¹⁶。この3月からLHN刊行へ向けての具体的な進展が始まった。LHNの初版奥付は1918年とあるが、国内の巡業に駆け回っていたバルデロマルによるお墨付き、つまり序文執筆を待っていたために、実際にこの書籍が刊行されるのは1919年7月となった¹⁷。結局序文は掲載されず、バルデロマル自身も旅先のアヤクチョで急死してしまう。バジェホが執筆したバルデロマル追悼記事の陰には、幻の序文にまつわるこうしたエピソードが隠されていたわけである¹⁸。LHNの表紙には著者名César A. Vallejo(AbrahamのA)と題名、右下に出版地Lima、公称刊行年1918と印刷されている(版元不記載¹⁹)。この初版には、一定部数の製本後にバジェホ本人が一度ゲラに校正を加えたため、装丁は同じでありながら一部の詩の細部に差異をもつ異本が存在することが判明しているが、これについては詩全集の解説において改めて言及する。

1949年バジェホ最初の詩全集がブエノスアイレスのLosada社から出版されるまで、刊本としてのLHNはこの1918年の初版以外に存在しなかった。以降、版を重ねるたびに、あるいは詩全集が編集されるたびに、1918年の

LHNは徐々にその姿を変えてゆく。

2. 2. Trilce.

Vallejo, César A.: *Trilce*. Lima, Talleres Tipográficos de la Penitenciaría, 1922. 121pp. (以下TR)

[Vallejo, César.: *Trilce*. (segunda edición) con prólogo de José Bergamín y salutación de Gerardo Diego. Madrid, Compañía Ibero-Americana de Publicaciones, 1930. 206pp. (以下TR2)]

北半球で第一次大戦の終わった1918年、リマにおける二度目の暮らしを送っていたバジェホは、三つの訃報に接する。トルヒヨ時代の恋人、文学における師と慕っていたマヌエル・ゴンサレス・ブラダ、そして故郷の母である。またこの年には、勤めていたリマの小学校経営者一家の15歳の娘との関係のもつれが原因で職を辞すというトラブルも起こしている。精神的なバランスを欠いたまま迎えた1919年は、第一詩集刊行、アヤの戯曲を地で行くボヘミアン生活、生活の困窮、地方から何らかの形で文芸の道を志してリマへ集まる人間を支える柱であったバルデロマルの急死などが続き、すでに26歳になっていたバジェホにとって、1918～1919年とは、第一詩集LHNを刊行した華々しい時代であったと言うより、転落の2年間であったと言うほうがふさわしい。TRに収められた作品の執筆時期についての分類報告によると、77作品のうちの3作が1918年、48作が1919年、4作が1920年、共にリマで執筆されていることが確認されている²⁰。が、転落に拍車がかかるのは1920年の冬のことである。4月トルヒヨに帰還したバジェホは、翌月には故郷のサンティアゴ・デ・チュコへ赴く。一旦トルヒヨに戻った後、7月23日開催の守護聖人祭見物のため再びサンティアゴへ舞い戻ったバジェホは、8月1日ある事件に巻き込まれる。事件は、地元の政治的緊張が高まっていた時期、年に一度の祭という非日常の儀礼を行い市民が気分的に高揚していた中、準軍事組織の警備隊員数名が飲酒酩酊の末、監獄にいた囚人—この囚人は聖人祭実行委員の商店主の関係者だった—数名の身柄を解き放つと共に職場放棄をするという不祥事に端を発する。この事件だけならまだ收拾がついたのだが、町ではすぐさま警備隊員と囚人の搜索隊が緊急に組織され、一種の山狩りが行われる。そして、それに聖人祭実行委員とは敵対する派に加担していた市内の成人男子多数が参加するという、いささか狂騒じみた事態へと発展することになる。急造の搜索隊

はやがて件の商店主の店へと押し入り、下手人がいないと分かるとその鬱憤を晴らすべく火を放った。8月20日に国選の弁護士が市に到着、ようやく事態の收拾を図る。結果、最初に放火が行われた商店で目撃された人間を中心に12人の人間が逮捕、その12人の中に「知的扇動」を行った罪に問われたバジェホも含まれていた。バジェホは行方をくらましてウワマチュコからトルヒヨへと知り合いのつてを頼って転々と逃亡生活を送り、一旦トルヒヨ郊外にあるアンテノル・オレゴ所有の別荘に身を隠す。が、結局11月トルヒヨで司直の手に委ねられ、それから112日間の牢獄生活を送ることになった。この事件については、バジェホの残した詩や近親者の伝記のみを頼りに、TRの作品分析において都合のよいように「冤罪」とされてきた印象が強いのだが、現在なお冤罪・有罪どちらかに断定できる確定的材料が出揃っているわけではないため、表現に際しては注意されたい。この逃亡中、あるいは禁固生活中に書かれた13作品が後にTRに収録される。1921年2月26日トルヒヨの監獄から解放されたバジェホは、翌3月リマへ行き、再び文芸仲間と交わりつつ、初等学校での教職にもつく。6月20日、リマの新聞紙上で、バジェホが獄中で執筆した散文と韻文数点を近々刊行予定、との記事が「ダダイズム：ペルーにおける代表的作家²¹」との題で掲載されている。記事の中では韻文集の題名がEscalas.と予告されているが、事実は散文のほうが1923年*Escalas melografiadas por César A. Vallejo.*として刊行された。また同じくこの時期にコンクールに投稿した短編小説*Más allá de la vida y la muerte.*が翌1922年6月17日『バリエダデス』に掲載され、後に*Escalas...*に収録される。1921年7月ごろ、トルヒヨ時代の友人に対し、LHN刊行前後より書きためていた詩をまとめて刊行する意志を伝えているが、この時点ではまだ題名も詳しい体裁も定まっていなかった。翌1922年夏、さらに書き加えた詩も加えて、ようやくローマ数字のタイトルをもつ77編の詩を一遍の本として刊行する運びにまでいたるが、バジェホが最初の数ページのゲラが既に組まれた頃に題名をCráneos de bronce(青銅の頭蓋骨)に、さらにペンネームをCésar Perúと希望しているのを知って驚いたリマの同居人が、各ページ上欄外の見出しに記載される題や署名の部分の改訂して新たにゲラを組み直すには「もう3リブラtres libras más費用がかさむ」との理由をつけて、やんわり警告する。それを聞いたバジェホが3(tres)という数字をぶつぶつと呟くうちに決定したのがTrilceという題であるとする説がある²²。これはいわゆる「伝聞」説であるが、TRの題名の由来に関する

諸説はいかに説得力あろうともすべて「憶測」の粹を出ないわけである。伝聞説のほうが少なくとも憶測よりは信憑性が高い。9月、バジェホはゲラ刷りの版をトルヒヨにいるアンテノル・オレゴに送る。バジェホは、ポエミア時代から兄のように慕い、そして故郷での事件の後の逃亡・幽閉生活の間も絶えず自分を励まし続けてくれたこのトルヒヨの賢人に、新しい詩集の序文執筆を求めている。2週間後に送り返されてきたオレゴの「序文」と共に、1922年10月、ついにバジェホの第二詩集が出版された。LHN同様、表紙にはCésar A. Vallejoの署名、題名と鉛筆書きの肖像画がデザインされている。TRは200部出版された。前年末17年ぶりに帰国したホセ・サントス・チョコノ²³がリマ文壇の話題を一身に集める中、まさにバジェホ自身が表現するごとく、TRは「何もない空虚に生まれ落ちた²⁴」のである。もっとも、たとえばあの律儀なクレメンテ・パルマなどは「文学警察」というユニークなコラムの中できっちりと反応をしている。いわく「“容疑者”-トルヒヨの詩人バジェホの本が巷を徘徊している。警察当局はその内容については未調査であるが、題名がすこぶる怪しい。この本には絶対にかある。この本、なんと題を“トリルセ”という。トリルセ? ²⁵」と題の新語に過剰に反応することで、相変わらずの毒舌振りを展開しているのだが、このパルマの批評により二つのことが明らかになる。200部しか刊行されなかったTRが、とにかくにも文芸批評家の注目は浴びていたということ、内容よりもまず題名が注目をひいていたということ、の二点である。

TRに誤字が存在したことはTR2におけるバジェホ自身の改訂によって証明されている。だがそれ以上に、表現の斬新さ、新語の多用など、いわゆる前衛というコードに適合する文体上の特徴が災いし、その後の詩全集などの編集において、TRは細部に多大な変化を被ってゆくのである。

バジェホは翌1923年3月、すでに述べたように短編集*Escalas...*を刊行し、5月にはポーの『ウィリアム・ウィルソン』を思わせる幻想的な短編小説*Fabla salvaje*も刊行する。そしてトルヒヨではオレゴが日刊紙『エル・ノルテ』*El Norte*を創刊、バジェホはオレゴの命によりリマ専属の特派員として記事を執筆し始める。ここからバジェホの後半生における重要な文筆活動の一環、すなわちジャーナリズム活動が始まる。が、不安定な教職などリマ暮らしの経済的困難に直面し、同時に例の放火事件に関してトルヒヨで新たに公判手続きが進行しているという情報をつかんだバジェホは、前々から望んでいたパリ渡航の決意を固める。6月17日、バジェホは、オレゴ

の甥で遺産相続によりまとまった現金を所有していたフリオ・ガルベスを伴い、カジャオ港からヨーロッパ行きの汽船オロヤ号に乗船する。これ以降バジェホが祖国の土を踏むことは二度となかった。

パリ到着後のバジェホはひたすら赤貧にあえぎ、翌1924年には痔の手術を受けるなど体調も優れなかったが、そんな中でも『エル・ノルテ』に記事を送ったり、また時間をみつけてはビセンテ・ウイドブロ、フアン・ラレアといった詩人と会い、少しずつ世界を広げてゆく。1925年には初めてマドリッドへ行く機会を得、フアン・グリスと会う。またリマの雑誌『ムンディアル』*Mundial*にも記事を送り始めたため、執筆機会が一気に増える。翌1926年には、ウイドブロ、ピエール・ルヴェルディ、ヘラルド・ディエゴ、トリスタン・ツァラ、グリスといった作家・芸術家の執筆協力を得て、パリでラレアと共に文芸誌*Favorables-Paris-Poema*を編集(2号まで刊行)する。渡欧後のバジェホの残した文献、特に「ヨーロッパより」*Desde Europa*と題されリマやトルヒヨの雑誌・新聞に掲載された一連の紀行文は、1920年代ヨーロッパという巨大なエネルギーの揺籃を目撃した「一アンデス出身の作家」の証言として、今日貴重な価値をもつ。その読解については別に改めて論じることとして、ここではTR2の出版経緯を確認しておこう。

1929年9月スペインに渡ったフアン・ラレアは、ヘラルド・ディエゴとホセ・ベルガミンにバジェホの2冊の詩集を託し、新たな版作成の可能性を探ってほしいと求める。このときの好感触を伝えるラレアの話を受け、同年12月と翌1930年1月にバジェホ自身がディエゴへ感謝(とお願い)の手紙を書いている。実は、この1929年、バジェホは既に同棲していたジョルジェットを伴って、レニングラード、モスクワへと到る東西ヨーロッパ遍歴旅行を敢行している。この時期は、バジェホが共産主義思想を急速に言説化し始める頃であると同時に、パリ生活も6年目、私生活の隅々に渡るまで自信がつき始めていた頃でもあっただろう。が、一人の作家として己をみなした時、果たしてどこまでの自信がもてたのだろうか。ペルーの狭い文壇でさえ大した反響のなかった自分の詩集が、果してスペインで出版・反響という段階を踏むことができるのか、スペインの詩人に認められるのか、当時のバジェホがスペイン語で創作活動を行う詩人として率直な不安を抱いていたということが、このエピソードからも、そして手紙の文面からも伝わってくる²⁶。

5月にスペインへ入ったバジェホはマドリッドで出版社と最終的な打ち

合わせを行い、ディエゴやベルガミンとも親交を深める。結局、ベルガミンが序文を、ディエゴが詩人を称える詩(*Valle Vallejo*)を書くことで話がまとまり、こうしてTR2は1930年7月に出版された。この頃の雑誌記事の署名ですでにそうしていたように、表紙の執筆者名は、César VallejoとミドルネームAbrahamのAを割愛している。

TR2には、バジェホ自身の手により、あるいは版元により、TRに新たに改訂がなされた形跡が見られる。

2. 3. 詩全集における生前詩集の扱い

LHNもTRもその入手は容易ではない。実物あるいは複写を入手できぬ以上、後世の版に頼らざるを得ない。ここでは代表的な詩全集を取り上げ、生前詩集に関する扱いをめぐる特徴を吟味してゆく。

Vallejo, César.: *Poesías completas (1918-1938)*. Buenos Aires, Losada, 1949.

この文献には「初めて編まれたバジェホの詩全集」という歴史的価値しかない。生前詩集についても初版との誤差があまりに大きすぎて、学問的に典拠とみなすには不十分な資料である。

Vallejo.: *Obra poética completa. Edición con facsímiles*. (ed. de Georgette de Vallejo) Lima, Moncloa, 1968. (以下GV)

バジェホのいわゆる2冊の没後詩集をめぐっては、そのオリジナル手稿の所在が長らく不明のままであった。それを一気に解決したのがバジェホ夫人ジョルジュットの監督のもとで編まれたこの詩全集で、特にパリ時代の詩の手稿の写真版を収録しているのが最大の特徴である。生前詩集についてはLHN、TRを基にしているが、編集者が文法規範から外れると判断した部分を細部で修正しており、修正自体はよいとしても、それに関する注記が決定的に不足している。結局GVはLHNとTRの忠実な再現あるいは注解書とはみなせない。たしかに、GVは1968年以降1990年代初頭まで、初版を入手できない研究者にとって唯一の典拠となってきた。そうした研究史における功績・重要性は評価される。だが、研究の進んだ今となつては、忠実な初版の再現ではないという欠陥、考証資料の範囲が狭いという欠陥なども、考慮に入れておく必要がある。

Vallejo.: *Poesía completa*. (ed. de Juan Larrea) Barcelona, Barral, 1978. (以下JL)

Vallejo.: *Obra poética completa*. (ed. de Enrique Ballón Aguirre) Caracas, Biblioteca Ayacucho, 1979. (以下EBA)

GVで夫人が写真版を提供したことによって、没後詩集をめぐる議論に一応の終止符が打たれた。結果、逆に火がついたとも言えるのが生前詩集の成立過程、すなわちオリジナル版の所在をめぐる論争である。トルヒョヤリマの雑誌に複数回投稿されたオリジナル版、そのそれぞれが投稿された号が調べられ、各版の差異とバジェホの詩人としての成熟過程が検討された。さらにLHNからもれたいわゆる若年詩群*Poemas juveniles*の渉獵も盛んに行われ、バジェホ研究の進展に合わせるようにして、次々と貴重な文献が世に紹介されていった。詩全集において先鞭をつけたのは、バジェホのパリ時代の盟友ファン・ラレアの編集による1978年版JLである。アルゼンチンのコルドバ大学で開催されたシンポジウム「アウラ・バジェホ」におけるラレア自身の研究発表が母体となっているこの詩全集は、LHNとTRのオリジナル版、若年詩群、1923年スペイン・コルニャの雑誌に掲載された単体の詩*Trilce*。(GVには掲載されず)などを初めて世に提供した。もちろんラレアが編集者である以上、当然TR 2も考証資料に含まれている。1979年のEBAは、GVを母体にしつつ、LHNとTRのオリジナル版22作品と1923年の単品*Trilce*を巻末に含むが、考証資料における新たな展開はない。Biblioteca Ayacuchoシリーズの1冊ということで、さすがに巻末の年表を含めなにかと利用に便利な文献ではあるが、それを除くとGVとJLを凌ぐ成果はなにも提供していない。

Vallejo.: *Poesía completa*. (ed. de Raúl Hernández Novás) La Habana, Casa de Las Américas, 1988. (以下RHN)

1980年代後半から、編集当初より学問的典拠となるべくして作られた詩全集がいくつも登場する。先鞭をつけたのがRHNである。今までにない豊富な注記が特徴で、考証資料も当時の限界まで網羅している。RHNの弱点は編者が没後詩集の手稿の実物を参照できなかったことくらいであると言われている²⁷。RHNに関しては、GVを母体とした、より精度の高い学術的に優れた典拠を作った成果が評価される。

Vallejo.: *Obra poética*. (ed. crítica de Américo Ferrari) Madrid, Colección Archivos, 1988. (以下AF)

RHNとほぼ同時期に出たのがAFである。LHNとTRの初版を参照しており、どちらも考証資料の幅を当時の限界まで拡大している。作品それぞれの雑誌掲載時のオリジナル版をその作品の右ページに掲載するという斬新な装丁も研究者の間で話題を呼んだ。野心的な学問業績であることは誰もが認める事実である。が、編集における修正方針は後続の詩全集を編集するペルーの研究者、とりわけ以下にあげるゴンサレス・ビヒルによる厳しい批判の目に晒さることになる。特に、初版の誤字に関する注記において「バジェホが間違ったと思われる」といった大胆な推測を提示し、これまでにない大幅な修正が行われた。

[Vallejo.: *Trilce*. (ed. de Julio Ortega) Madrid, Cátedra, 1991. (以下TR/J O)]

TRとTR2の違いはどこにあるのか。TR2の編集に際してバジェホが手を加えたのは(誤字が発生・消滅したのは)どの部分か。この基本的な疑問に一定の回答を与えてくれたのがこのTR/J Oである。各詩編の成立事情に関する緻密な報告もあり、非常に有用な資料といえる。詩全集ではないが、TRに関係する重要な文献として記載しておく。]

Vallejo.: *Obras completas. Tomo I. Obra poética*. (ed. de Ricardo González Vigil) Lima, Banco de Crédito del Perú, 1991. (以下RGV)

これは様々な意味で重要な詩全集であり、現在バジェホ研究を行う者が座右の書とでもすべき貴重な資料である。生前詩集に関して言うならば、その特徴は三つ。まず雑誌掲載時の全オリジナル版、未公開の全初版、若年詩群、TR2を考証資料としている点。ここに到るまでには、ホルヘ・キシモト・ヨシムラを中心とした独自の情報網を築いてきた編集者の「地の利」と「情熱」が背景にあった。次に、初版の改訂部分に関しては、明らかな誤字の改訂から句読点・記号の削除・追加一つに到るまで、必ずその改訂の動機を添えた詳しい注解をつけている点。これは、バジェホの初版の「誤字」に関して、これまでの詩全集中(特にAF)におけるその極めて恣意的な扱いに対し疑問を抱いていた、バジェホの祖国ペルーの学者であり自らも詩人であるゴンサレス・ビヒル²⁸が、結局自らの手で完成させた詳細な注解である。言うまでもなく、誤字の扱いについては、一般的に考えても、散

文における再版編集時と韻文における再版編集時とは、まったく意味合いが異なってくる。RGVの3つめの特徴は、LHNに関し、JLやRHNやAFにおける改訂部分を編集者自身が持つ初版で確認できなかった場合、すべてその旨を注記している点。これにより、詩全集をすべて調べている研究者の前には、いわゆるLHNの異本の存在が明瞭に浮かび上がってきたのである。なおLHNの章には、純粹に文献学的な注記のほか、編集者自身が大学で行った講義をもとにした大変ユニークかつ事細かな解釈注が添えられている²⁹。TRについては、1922年版TRに基づきつつ、TR2との差異に関し精密な注釈を加えているという点で、TR/JOに類似する。

Vallejo.: *Poesía completa I ~ IV*. (ed. de Ricardo Silva-Santisteban) Lima, Pontificia Univ. Católica del Perú, 1997. (以下RSS)

バジェホの詩全集に関する現時点での最新の成果は、この4巻からなるRSSであると言ってよい。ケチュア語彙など、バジェホが独自の感覚で用いた語に関する不必要な文法的改訂を行わず、それを誤字として扱っていない点は、RGVよりさらに一步前進したと言える。注解の少なさ、シンプルで読み易い装丁というのがRGVと比べたときの最大の特徴であるが(RGVが分厚い6cm幅の1巻本であるのに対しRSSは2.5cm幅の4巻本)、考証資料については1997年時点で考えられ得る限りの限界に挑戦している。また、RSSは、長らく疑惑の対象であったLHN異本の存在を明るみに出した。バジェホが出版過程の途中で改訂を行った詩がどれなのか、その詩のどの部分がどう異なるのかが、これではっきりと判明した。丁寧なことに、異本で改訂の見られる詩編に関しては、全て2枚写真版(正本・異本)を提供している。ただ、初版に忠実にバジェホの文体を再現したい、しかも「迷宮的な注解は避けたい」とする詩人肌のリカルド・シルバ・サンティステバン³⁰による編集方針が影響したのか、TRについては第2版に関する注解が欠けている。もっとも、TR/JOやRGVにおける調査を踏まえつつ、適切な改訂がなされてはいる。また、LHN、TR、TR2それぞれの序文や、前後して新聞雑誌に掲載された批評文が網羅的に掲載されていることは、この文献の利用価値を大いに高めている。

3. まとめ

筆者自身はLHNもTRもTR2もその実物を参照していない。後世の詩全集

と研究史を頼りに3点の原典の「かたち」を割り出すしかなかった。1990年以來もっぱらRHNを使用していたが、初版の再現を試みようとして、その後さまざまな詩全集と接するうちに、もともと異文の多い没後詩集に限らず、生前詩集の扱いについても、各詩全集によって相当な差異が存在することが分かってきた。特に、バジェホという詩人が文学史によりいわゆる前衛のレッテルを貼られたこと、研究史の進展と共にペルー国外の大手出版企業からの刊行という機会も増えたこと(本文では触れなかったが、質の劣る詩全集が他にいくつも刊行されている)、こうした事情から、版によっては「世界的な紹介」という様々な思惑を孕みがちな編集方針の中、ともすれば安易な改訂作業が進められることもあったのではなかろうか。アメリカ・フェラリ、ジーン・フランコ、フリオ・オルテガ、ホセ・ミゲル・オビエドといった著名な研究者を巻き込み、計画当初から国際的規模の学術事業として目論まれたAFが結果として細部に多くの欠陥をはらむ詩全集になったのは、それぞれの個人編集者の責任というよりは、AFという文献がまさしく「国際的事业」だったからなのではあるまいか。逆にこうした傾向に異を唱え、地道に初版やオリジナル版と格闘し、「何が誤字なのか」という議論にいつそうの慎重さを求め続けた、リカルド・ゴンサレス・ビヒルや、TR/JOでのフリオ・オルテガなど、ペルー国内の研究者たちの努力こそ、今後のバジェホ研究にとってもっとも強固な礎となるに違いない。なお、拙稿では具体的に例をあげなかったが、生前詩集の誤字議論は正確にはまだ終了しているわけではないので、いつか改めて別の機会に論じることとしたい。

生前詩集に関しては、初版を典拠として注解の記された詩全集を基に、まず研究者自らが初版の完全な再現版を作成するしかない。刊行されている詩全集としては、現在のところもっとも信頼のおける学術的典拠はRSSとみなしてもよいだろう。それが実際に典拠として扱われていくのかについては、今後の研究史の推移を見守っていくより他ない。

- ¹ 木村栄一「シンボジウム/日本におけるラテンアメリカ研究/文学」(『ラテンアメリカ研究年報』No.1, 日本ラテンアメリカ学会, 1981, p.8-10.)
- ² 野谷文昭「『黒き使者』及び『トゥリルセ』における家・家族のテーマとその意味」(『Hispanica』21. 日本イスパニヤ学会, 1977年, pp.101-114)／吉田秀太郎「セサル・バジェホとその時代」(『Estudios Hispánicos』12. 大阪外国語大学イスパニア語研究室, 1986年, pp.17-31.)／今福龍太「父を忘却する－混血論2」(『クレオール主義』青土社, 1991年, pp.127-148.)／Tamura Kawamura, Satoko: “Interpretación personal de un poema de *Trilce*” en *Vallejo, su tiempo y su obra. Tomo I*. Lima, Univ. de Lima, 1994, pp.165-172.／木村栄一「ラテンアメリカのモダニズム」(『モダニズム研究』思潮社, 1994年, pp.462-481)／松本健二「セサル・バリエホに関する批評の考証」(『阪南論集人文自然科学編』31巻2号, 1995年, pp.31-38.)／松本「心の病と詩・バリエホの場合」(『Estudios Hispánicos』21. 大阪外国語大学スペイン・イスパノアメリカ研究室, 1996年, pp.57-72.)
- ³ Clemente Palma (1872-1946): ベルーの小説家, 評論家。作家リカルド・バルマの息子。幻想的な短編小説を得意とした。リマの文芸誌『バリエダデス』*Variedades*の創刊編集に携わる。
- ⁴ Ciro Alegria (1909-1967): ベルーの小説家。1944年バジェホに関して述べた雑誌掲載記事が右記文献に転載。Alegria, Ciro.: “El César Vallejo que yo conocí” en Ortega, Julio(ed.): *César Vallejo*. Madrid, Taurus, 1974, pp.155-170.
- ⁵ サークルのメンバーでバジェホと交流のあった詩人Juan Parra del Riego(1884-1925)による命名。このサークルは「ノルテ」Grupo Norteと称されることもあるが, この「ノルテ」は1923年アンテノル・オレゴ(→注6)によって創刊されたトルヒヨの日報紙名と混同されるので研究論文では使用されない。ホイットマンとゴンサレス・ブラダの影響下で詩作を開始したバラ・デル・リエゴは未来主義的な作風の詩を残している。Parra del Riego, Juan.: *Polirritmos y otros poemas*. (prólogo y selección de Jaime Urco) Lima, Instituto Nacional de Cultura, 1987.
- ⁶ Antenor Orrego (1892-1960): ベルーのトルヒヨを中心に活動した政治思想家。アブラ草創期の熱心な賛同者の1人として文筆・政治活動に携わる。1915年から23年にかけてトルヒヨで「ボエミア」を率い, この場がリマのバルデロマルによるコロニダ(→注9/10)と同様の機能を果たした。バジェホに関し右記の文献が存在する。Orrego, Antenor.: *Mi encuentro con César Vallejo*. (editor Luis Alva Castro) Bogotá, 1989, Tercer Mundo Editores.
- ⁷ Victor Raúl Haya de la Torre (1895-1979): ベルーの政治家・ペルーアブラ党の創始者。トルヒヨの没落階級出身で青年時代をこの北部の町でボエミアの面々と過ごしたアヤは, 周知のようにその後1917年にリマへ出ると同時に精力的に学生・労働運動を組織, 1919年の歴史的ゼネストを率いた後, レギア政権下でメキシコへ亡命中の1924年, アメリカ人民革命同盟Alianza Popular Revolucionaria Americana: 通称アブラAPRAを旗揚げすることになる。
- ⁸ 野谷文昭「一九二〇年代ラテンアメリカの統合と分裂」(『越境するラテンアメリカ』

PARCO出版, 1989年, pp. 144-182.)

- ⁹ コロニダColónidaはあくまで雑誌名だが(→脚注10), 文学史においては, バルデロマルとこの雑誌を中心とした文芸・作家の動向全般をさし「コロニダ運動」Movimiento へと称されることがある。
- ¹⁰ Abraham Valdelomar (1888-1919): ペルーの文人。新聞記者・戯画家としてスタート, 1913年よりニューヨーク, ローマなどを約1年間の外遊の後, 1916年文芸誌『コロニダ』Colónidaを創刊する。創作家としての評価はもちろん, リマのみならずペルー中の文芸運動の中心となり, バジェホ, アヤ, エグレン, マリアテギといった多くの才能を交錯させることができた異能の道化としての価値に注目すべきである。『コロニダ』については右記の写真版が参照可能。Colónida. Edición Facsimilar. Lima, Ediciones COPÉ, 1981.
- ¹¹ José Carlos Mariátegui (1894-1930): ペルーの作家, マルクス主義者。Siete ensayos de interpretación de la realidad peruana. (1928)におけるバジェホ論が対象にしているのは1918年のLHN。左記バジェホ論はもともと1926年6月リマの雑誌『ムンディアル』Mundial. に2度にわたって掲載されたもの。
- ¹² José María Eguren (1872-1942): ペルーの詩人, 画家。エグレンの文献については絵画も含む右記資料, 及び日本語詩論を参照。Eguren, José María.: Obras completas. Lima, Banco de Crédito del Perú, 1997. / 松本健二「ホセ・マリーア・エグレンの詩に見られるヨーロッパ象徴主義との異質性」(『阪南論集人文自然科学編』31巻3号, 1996年)
- ¹³ Manuel González Prada (1848-1918): ペルーの作家, 思想家。アヤやマリアテギらに受け継がれてゆく思想的文脈は当然のことながら, ゴンサレス・ブラダのモデルニスモ詩人・韻律研究家としての側面を忘れてはならない。González Prada, Manuel.: "Ortometría, apuntes para una rítmica" en Obras. tomo III, volumen 5. Lima, Ediciones COPÉ, 1988.
- ¹⁴ "Palma, Clemente.: "Correo franco" en Variedades. No.499. Lima, 22 de septiembre de 1917, p.1010." en Vallejo.: RSS I, p.266.
- ¹⁵ 記事の執筆者はマリアテギであるという説もある。Spelucín, Alcides.: "Contribución al conocimiento de Vallejo" en César Vallejo; poeta trascendental de Hispanoamérica, su vida, su obra, su significado. Córdoba, Univ. Nacional de Córdoba, 1962.
- ¹⁶ Valdelomar, Abraham.: "La génesis de un gran poeta. César Vallejo, el poeta de la ternura" en Sudamérica, año I, núm.11, Lima, 2 de marzo 1918. (Valdelomar.: Obras II. Lima, EDUBANCO, 1988, p.771.)
- ¹⁷ Flores, Angel.: "Cronología de vivencias e ideas" en Flores (ed.): Aproximaciones a César Vallejo 1. 1971, New York, Las Américas. p.43. アンテノル・オレゴによるLHN刊行予告記事がリマの新聞に掲載されたのが1919年7月23日, LHNに関する最初の書評がリマの新聞に掲載されたのが同7月28日。
- ¹⁸ "Vallejo.: "Abraham Valdelomar ha muerto" en La Prensa. Lima, 4 de noviembre de 1919." en Vallejo, Obras completas. Artículos y crónicas (1918-1939). Lima, Banco de Crédito del Perú. 1997, pp.657-658.

- ¹⁹ 版元 (Edit. Souza Ferreira) の確定作業は終了している。Oviedo, José Miguel.: “Contextos de *Los Heraldos Negros*” en *Vallejo, su tiempo y su obra. Tomo I.*, p.80./Rodríguez Zea, Miguel Angel.: “Bibliografía selecta de César Vallejo” en Vallejo.: *RSS IV.*, p.191.
- ²⁰ Espejo Asturrizaga, Juan.: *César Vallejo. Itinerario de un hombre (1892-1923)*, Lima, Mejía Baca, 1965, pp.112-113.
- ²¹ “Lora, Juan José.: “Dadaísmo; sus representantes en el Perú” en *La Crónica*, Lima, 20 de junio de 1921, pp.6-7.” en Vallejo.: *RSS II.*, pp.160-167.
- ²² Espejo Asturrizaga.: *op. cit.*, p.136.
- ²³ José Santos Chocano (1875-1934) : ベルーのモデルニスモの詩人の一人。残した作品よりその波乱万丈の人生を辿るほうが興味深い典型的放浪(放蕩)作家。自らの絶頂期にあったスペイン滞在時に金銭トラブルを起こし、以降キューバ、革命に揺れるメキシコを転々とし、ゆきついた先のグアテマラで、ミゲル・アンヘル・アストゥリアスの『大統領閣下』(1946)のモデルにもなった独裁者マヌエル・エストラダ・カブレラの寵愛を受けるが、1920年エストラダ・カブレラ失脚後幽閉され同国首都で死刑宣告を受ける。同年12月釈放されリマに帰還、市民から大歓迎を受けた。
- ²⁴ アンテノル・オレゴへの書簡(日付不明). Vallejo, César.: *Epistolario general*. Valencia, Pre-Textos, 1982, pp.44.
- ²⁵ “Palma, Clemente.: “Policía Literaria” en *Variedades*. No.768. Lima, 18 de noviembre de 1922, p.6668.” en Vallejo.: *RSS II.*, p.185.
- ²⁶ Vallejo, *Epistolario general.*, p.209./p.213-214.
- ²⁷ Vallejo.: *RGV*, p. XLV II
- ²⁸ Ricardo González Vigil (1949-) : ベルーの詩人、文学研究家。70年代に都会的な題材の詩でデヴュー、その後は文芸批評家、研究家としても活躍。
- ²⁹ González Vigil, Ricardo.: *Leamos juntos a Vallejo. Tomo I. Los heraldos negros y otros poemas juveniles*. Lima, Banco Central de Reserva del Perú, Fondo Editorial, 1988. がその母体。
- ³⁰ Ricardo Silva-Santisteban (1941-) : ベルーの詩人、文学研究家。ジョイスや日本文学の翻訳家としても著名。

参考文献

- Larrea, Juan.: *Al amor de Vallejo*. Valencia, Pre-Textos, 1980.
- Sobrevilla, David.: “Las ediciones y estudios vallejanos: 1971-1979. Un estado de cuestión.” en *César Vallejo: Actas del Coloquio Internacional Freire Universität Berlin*. Berlin, Max Niemeyer, 1981.
- *Introducción bibliográfica a César Vallejo*. Lima, Amaru Editores, 1995.
- Vélez, Julio. & Merino, Antonio.: *España en César Vallejo. Tomo I: poesía*. Madrid, Editorial Fundamentos, 1984.

Vallejo al café. Entrevistas, ilustraciones & cronología. Lima, Jaime Campodónico/Editor, 1990.

Vallejo: cien años de ser. 1892-1992. Lima, Museo de la Nación, 1992.